

巻頭特集

父が造り、子が伝える

椎名硝子

GLASS-LAB

椎名硝子は今年で68年目のガラス加工業の老舗だ。主に平切子の手法でガラスを加工してきた。GLASS-LAB は今年4年目で有りながら、椎名硝子の魅力をネットや体験会などを通じて世間に広げている。

江戸切子の一種である平切子
清澄白河に残る硝子加工

ギイイイイ…。清澄白河の街中で研磨音が響く。ブルーボトルコーヒーのすぐ近くに椎名硝子の工場がある。工場に入ると、すぐ右手側にキラキラと輝く江戸切子のガラスが置かれていた。「江戸切子」は硝子を研磨機の先端でカットし模様をつけていく手法だ。その柵の下に目をやると透明なガラスが置かれており、こちらは「平切子」という技法で作られた切子グラスだ。「平切子」とは、研磨機の先端ではなく面の部分で削る技法で、ガラスの底面などを磨いて平にしたりするときに行われる技術。「祖父の代にもう一つの江戸切子である平切子の製作をはじめました。」とは2代目職人椎名康夫さん（写真左）の長男で、椎名硝子のプロデューサーなどを手がける隆行さん（写真右）。



平切子の手法とサンドブラストで作られた北斎のグラス

椎名硝子で使われている研磨機は、先代による手作りだ。木の高さを添え木で調整していたり、適度に水が出るよう洗濯バサミでホースをしぼめていたり、工夫の跡がみられる。驚くべき点は一つのモーターが連動して全ての研磨機を動かしていることで、職人が多かった時代にはとても効率の良い仕組みだった。この仕組みは過去には多く使われていたそうだが、現在では日本で教台しか現存していない、現役で稼働しているのはこの椎名硝子だけだ。とてもノスタルジックな工場である。

北斎の絵が描写された切子 技術を組み合わせさせて制作

椎名硝子では切子以外にも様々なガラス加工を請け負っている。20年ほど前にサンドブラストという機械を導入した。サンドブラストは高圧の砂を吹き付けガラスを削る。細かい造形が難しいと言われているが、



上部が回転し、複数の研磨機を動かす



研磨機の側面で削っている様子。平切子の製法

椎名硝子では0.15mmの正確さで掘ることができ、その精度は世界レベルだと評されたほどだ。これに平切子の技術を組み合わせ、様々な模様のグラスを製作することができる。葛飾北斎の絵が描かれたグラスを持つてきていただいた。とても詳細に描かれていて、まるで絵付けをしたかのような。細かなサンドブラストにて絵に深みを出している。技術と技術の組み合わせによって様々なデザインが可能になったという。

交流がアイデアを産み 現代に伝統を伝えていく

隆行さんは不動産情報サイトの営業職を退職し、家業の椎名硝子の販売や商品プロデュース等を行う会「GLASS-LAB」を立ち上げた。「3年前から工場に物販スペースを

設けました。当初は父から「人通の少ないこの道に」お客さんなんて来ないのでは」と言われていましたが、ちょうどブルーボトルコーヒーさんが出店する流れにあったので、観光客がくるのではないかと考えたのです」と隆行さん。その目論見は

「物販にくるお客様のなかから「体験はできないの?」という声が多かったんです。そこで、工場のお休みの土日に、硝子加工体験をできるようにしました。」液ダレのしない醤油

差しの体験は、直接ガラスを触れないで作業できるように改良し、安全でかつ高度な技術を体験できるように工夫されている。人と交流することで新しい発想が生まれるという。実際、お客さんのアイデアで商品が生まれることもあったそうだ。

父から子へ伝わる伝統 子が活用し変化させる伝統

昨年、次男康夫さんが3代目を継いで、主にサンドブラストの製作を手がけている。康夫さんは長男隆行さんのGLASS-LABに転籍し、平切子の製作を続けている。父と弟が技術を継承し、隆行さんが現代に合わせたプロデュースを行なっている。先ほどの北斎グラスも、家族の技術が結集して作られた。

吹きガラスのようなガラス製造と違い、既成ガラスを加工する仕事はあまり華やかでないのかもしれない。しかしそこに培われた技術は、大量消費社会を経験した現代だからこそ価値を感じる。伝統の技術を工場の中でだけ伝えるのではなく、外部と交流しながら伝えていくことで技術は時代に合わせて変化するのだろう。

今回お話を聞いた取材先

椎名硝子・GLASS-LAB

住所 江東区平野 1-13-11
TEL 03-6318-9407

硝子加工体験 (予約制)
体験料 ¥4,000/-1ヶ
体験時間 30分~60分程度

お問合せ
GLASS-LAB
<https://glass-labo.com/>



水を入れると光の屈折により底面の花が開いて見える